

商品類型No.140「詰め替え容器・省資源型の容器 Version1.3」分類 A. 詰め替え容器
認定基準の軽微な改定について

1. 改定の経緯

「詰め替え容器」は、単に“詰め替え”できるだけでなく、内容物1ℓあたりの容器重量を定め、軽量化の観点からも評価する認定基準となっている。この容器重量基準は、現行基準の見直し前の旧商品類型 No.31「詰め替え使用品のための容器」の認定商品、ならびに現行基準策定時の大手メーカー数社の詰め替え製品の仕様をサンプルとして、トップランナー水準と考えられるレベルに設定されている。

本認定基準は、プラスチック製（アルミ蒸着も多い）のいわゆる“スタンディングパウチ”を想定している。当時の詰め替え製品の主流はスタンディングパウチであり、No.31「詰め替え使用品のための容器」認定商品も全てスタンディングパウチであった。すなわち、紙製容器については全く想定がされていない重量基準となっている。

しかし近年、枯渇資源である石油を使わず、バイオマス素材でカーボンニュートラルであるという理由から、環境対策として詰め替え容器の紙化を薦める事例も増えてきている。「紙は目付が大きく、プラに比べて高価なため敬遠されがちであったが、最近では環境のためなら、ということでも少しずつ増えてきている」との容器メーカーの声も聞かれた。

紙製の“カートンボックス（以下、CBX）”は、中身が液体であれば、板紙の内面にプラを貼る構造になっている。スタンディングパウチの場合、フィルムの厚みが最大で150 μ 、坪量で150g/m²を切る程度であるが、CBXでは板紙で容量によって250～300g/m²であり、プラに比べて明らかに不利となる。このため、紙用の容器重量の基準値を別に設定することとしたい。

2. 改定箇所(抜粋)

4-1. 環境に関する共通基準と証明方法

(※ (1) 項を削除、「4-2. 材料に関する基準」(6) (13)項にそれぞれ移設)

4-2. 材料に関する基準と証明方法

容器を構成する主材料として、プラスチック材、紙材のいずれかを容器全体重量の70%以上使用しているものについては、該当する以下AまたはBのいずれかを選択し、適用する。また、それ以外の製品についてはCを適用する。

A. プラスチックを主材料とする製品

(6) 容器の重量は、表1の基準を満たしていること。

表 1 内容物に対する容器重量

内容物	容器の容量	内容物 1ℓ (あるいは 1000g) あたりの容器重量
液体、粒体、粉体	詰め替え容器の容量 ≤ 本体の容量	25g 以下
	詰め替え容器の容量 > 本体の容量	40g 以下
その他	—	50g 以下

【証明方法】 ※証明者＝申込者
 製品の容器重量：A (g)、内容物体積：B (ℓ)、内容物 1ℓ あたりの容器重量 (A/B) を付属証明書に記載すること。なお、内容物が粒体・粉体の場合の内容物体積は、製品出荷時の嵩 (かさ) [体積] を用いること。また、内容物が「その他」の場合は、体積 (B) を重量 (g) に置き換え、内容物 1000g あたりの容器重量 (A/B×1000) が基準値を満たすことでも良い。

B. 紙を主材料とする製品

(13) 容器の重量は、表 2 の基準を満たしていること。

表 2 内容物に対する容器重量

内容物	容器の容量	内容物 1ℓ (あるいは 1000g) あたりの容器重量
液体、粒体、粉体、その他	詰め替え容器の容量 ≤ 本体の容量	30g 以下
	詰め替え容器の容量 > 本体の容量	50g 以下

【証明方法】 ※証明者＝申込者
 ((6) と同じのため記載省略)

解説

A 資源採取段階

A - 1 (資源の消費)

- (1) 詰め替え容器および本体容器の重量について
- (2) 食用油容器の内部容器のプラスチック製フィルムの厚さ、外部容器の古紙パルプ配合率について

(前略) ～両案のメリット・デメリットを整理した結果、A 案を採用することとしたが、基準値は製品に応じて複数設定した。例えば内容物が液体と繊維では比重が異なり、詰め替え容器に求められる強度も異なるため、「液体・粒体」と「その他」で大別している。また液体・粒体では詰め替え容器の容量が本体よりも大きいものと小さいもので基準値を分けて設定した。(中略) …数値レベルは、プラスチック製容器 (いわゆる“ス

スタンディングパウチ”については、旧商品類型 No.31「詰め替え使用品のための容器」の認定商品、ならびに現行基準策定時の市場の詰替え製品の仕様をサンプルとして、トップランナー水準と考えられるレベルを設定した。紙製容器については、いわゆる“カートンボックス（以下、CBX）”が想定されるが、CBX は中身が液体であれば、板紙の内面にプラを貼る構造になっている。スタンディングパウチの場合、フィルムの厚みが最大で 150 μ 、坪量で 150g/m²を切る程度であるが、CBX では板紙で容量によって 250～300g/m²であり、容器重量はプラに比べて明らかに不利となる。このため、紙製容器の重量基準をプラスチック製容器とは別に設定することとし、CBX の市場の詰替え製品の仕様をサンプルとして、トップランナー水準と考えられるレベルを設定した。

3. 改定予定日 2010年7月1日

以上